顎関節症患者に関する治療後のアンケート調査による検討

丹下和久・荒尾宗孝・清水幹雄・奥村佳世子
押村進・竹本隆・水野進・吉田憲司

A study based on a questionnaire survey of patients with temporomandibular disorders after treatment

Kazuhisa TANGE・Munetaka ARAO・Mikio SHIMIZU・Kayoko OKUMURA
Susumu OSHIMURA・Takashi TAKEMOTO・Susumu MIZUNO・Kenji YOSHIDA

Abstract: In our department, approximately 40% of the patients with temporomandibular disorders voluntarily discontinue treated. This led us to conduct a follow-up study.

Two hundred nine patients were mailed a questionnaire an average of two years after treatment. One hundred fifteen patients responded. Among the 115 respondents, we examined the following two groups: one group with 45 patients who completed treatment, and another with 40 patients who voluntarily discontinued treatment. The result showed few noticeable differences between the two groups in terms of current joint condition, except for joint noise.

The major reason for discontinuation of treatment was that symptoms had resolved partially, although not completely.

Key words: temporomandibular disorder (顎関節症), follow-up study (予後遠隔調査), questionnaire study (アンケート調査)

緒言

口腔外科において顎関節症患者は増加しているが、その反面他の疾患に比べて治療の中断率が高いことでも知られている。当科の顎関節症患者の臨床統計的検討でも、患者の約40%が治療途中で受診しなくなっている^{1, 2)}。今回われわれは、治療終了または治療中断後の患者の顎関節の状態を把握し、またなぜ中断患者が多いかを解明するため、アンケート調査を行ったのでその結果を報告する。

対象および検討項目

アンケート調査の対象患者は平成3年10月より平成4年9月までの1年間に、当科を受診し顎関節症と診断され治療を受けた225名の患者のうち、その後も通院中である3名(その内2名は顎関節外科手術後の経過観察のための通院)を除いた222名に対し、治療

終了または中断後より、最長で2年5か月、最短で6か月、平均約1年11か月経過した平成6年4月にアンケートを送付し、回答の得られた115名である。宛名不明の13名を除いたため、送付対象は209名であり、アンケートの回答率は55.0%であった。

アンケート調査は無記名方式とし、質問は以下の項目とした。

1. 治療の終末の状態
2. 現在の状態
- (1) 顎関節部の総体的自覚症状 (2) 顎関節疼痛
- (3) 顎関節雑音 (4) 顎運動障害 (5) 最大開口量

表1 顎関節部の総体的自覚症状

	全く気にならない	ほとんど気にならない	かなり気になる	時々気になる
終了群 (45)	12 (26.7%)	17 (37.7%)	11 (24.5%)	5 (11.1%)
中断群 (40)	7 (17.5%)	13 (32.5%)	11 (27.5%)	9 (22.5%)

愛知学院大学歯学部口腔外科学第一講座
(主任：深谷昌彦教授)
The First Department of Oral and Maxillofacial Surgery, School of Dentistry, Aichi-Gakuin University (Chief: Prof. Masahiko Fukaya)
受付日：平成7年7月13日

表2 現在の顎関節の状態 * $p < 0.05$

			全く症状 がない	まれに症状 がある	いつも症状 があるが気 にならない	いつも症状 がありかな り気になる
1	顎関節 疼痛	終了群 (45)	24 (53.3%)	16 (35.6%)	5 (11.1%)	0
		中断群 (40)	27 (67.5%)	11 (27.5%)	2 (5.0%)	0
2	顎関節 雑音	終了群 (45)	11 (24.4%)	22 (48.9%)	9 (20.0%)	3 (6.7%)
		中断群 (40)	6 (15.0%)	15 (37.5%)	14 (35.0%)	5 (12.5%)
3	顎関節 障害	終了群 (45)	16 (35.6%)	19 (42.2%)	9 (20.0%)	1 (2.2%)
		中断群 (40)	7 (17.5%)	21 (52.5%)	12 (30.0%)	0

3. 治療中断理由

また今回のアンケートは通院中の患者を対象外としたため、結果的に保存的治療を受けた患者のみが対象となった。

結 果

アンケート調査の結果は、質問1の結果より対象となった回答者を、症状が消失および軽減した状態が継続したために、担当医と患者とが合意して治療を終了した終了群、あるいは症状の消失、軽減の有無に関わらず、治療を患者自らの意志により途中で中断した中断群、他科に紹介されたか、もしくは治療終了もしくは中断後に他医療施設で治療を受けたその他の3群に分けた。115名中、終了群45名、中断群40名、その他30名であった。今回は終了群と中断群との2群間で、以下の項目について結果を比較検討した。

1. 現在の状態

(1) 顎関節部の総体的自覚症状

現在、顎関節の状況が気になるかという質問を、全く気にならない、ほとんど気にならない、ときどき気になる、かなり気になるの4段階で尋ねた。その結果をMann-Whitney検定により検討したところ、終了群と中断群とに有意差は認められなかった(表1)「以下(2)～(4)は同一検定法によった」。

(2) 顎関節疼痛

顎関節の疼痛に関する質問を、全く症状がない、まれに症状がある、いつも症状があるが気にならない、いつも症状がありかなり気になるの4段階で尋ねた。両群ともかなり気になると回答した人はなく、統計的にも2群間に有意差は認められなかった(表2-1)。

(3) 顎関節雑音

顎関節雑音に関する質問を、同様に4段階で尋ねた。いつも症状があると回答した割合は、終了群で26.7%、

中断群では47.5%と中断群で高く、また統計的にも2群間に危険率5%で有意差を認めた(表2-2)。

(4) 顎運動障害

顎運動障害に関する質問を、同様に4段階で尋ねた。その結果かなり気になると回答した割合は両群ともにほとんどなく、統計的にも2群間に有意差を認めなかった(表2-3)。

(5) 最大開口量

アンケート調査時に紙製の開口量測定器を同封し、各自に自己測定を依頼しその結果を報告してもらった。その結果も検定により2群間に有意差を認めなかった。また今回は無記名によるアンケートであるため、同じ患者での逐日的比較はできなかったが、各群の平均値を比較すると、初診時では2群間に有意差を認めなかったが、最終通院時では危険率1%で有意差を認めた(表3)。

2. 治療中断理由

質問1で治療を途中で中断したと回答した患者にその理由を尋ねた。その結果最も多い中断理由は、症状は少し残っているが、それ程気にならなくなったからという理由であった。その他通院時間がたいへんであった、通院していても変化がなかった、症状が全くなかったためという理由により治療を中断しているという回答が多くみられた(表4)。

考 察

当科においては、他の口腔外科疾患に比べて、顎関節症患者の治療中断症例は多いことが判明している。他施設からの報告でも、竹之下らは43%の中止例があり³⁾、大村らは39.7%の患者が中断例となっていたと報告しており⁴⁾、顎関節症患者においての治療中断率が高いのは一般的な傾向であるように思われた。したがって顎関節症患者の治療を考える上で、中断率の高さの原因と、治療中断した患者もしくは終了した患者の状態を把握することは、重要なことと考え今回のアンケート調査を行った。

顎関節の総体的自覚症状に関する質問では、全く気にならないと回答した割合は、終了群の方が高く、またかなり気になると回答した割合は中断群で高かった。しかし2群間に統計的な有意差は認められなかった。これより治療後約2年経過した段階での顎関節の状態は、終了群のほうが良い傾向はあるものの、統計学的に差があるとは断言できなかった。

顎関節疼痛に関する質問では、両群ともに半数以上が全く気にならないと回答しており、2群間に大きな差はみられなかった。また統計学的にも有意差は認め

表3 平均最大開口量 (mm) ** p<0.01

	終了群 (45)	中断群 (40)
初診時	41.6±9.9	40.5±8.3
最終通院時	46.0±7.2	42.1±8.5
アンケート調査時	47.1±5.6	47.5±6.3

られなかった。かなり気になると回答した患者は両群とも全くなかったことと、疼痛が全くない、あるいはほとんど気にならないと回答した割合は中断群のほうがむしろ高かったことより、疼痛が消失および減少すれば、通院治療を受けなくなる傾向があると推測された。

顎関節雑音に関する質問では、いつも症状があると回答した割合は、終了群で 26.7%，中断群で 47.5% であり、中断群の症状残存率が高かった。また統計学的にも 2 群間に有意差を認めた。顎関節雑音の症状残存率は他の症状に比較しても高く、このことは雑音症状の改善が比較的困難で、難治性であることを示す反面、症状が残存していても通院治療をうけていないことより、患者もそれを容認しやすく、雑音の存在のみでは通院治療の動機になりにくいのではないかと推察した。

顎運動障害に関しての質問では、全く気にならないと回答した割合は終了群で高かったが、それ以外の回答は 2 群間で大きな差はなかった。またかなり気になるとの回答はほとんどなかった。統計学的にも 2 群間に有意差は認められなかった。

またいつも症状があるが気にならない、およびいつも症状がありかなり気になると回答した割合をそれぞれ症状別に比較してみると、両群ともに雑音、顎運動障害、疼痛の順であった。このことより治療終了および中断後も残存する症状としては、雑音が最も高く次いで顎運動障害であり、疼痛は少なく、これは患者が治療を受けていなくても、その症状を容認しやすい順でもあったと考えられた。逆にいえば、通院治療を継続する動機としては疼痛、顎運動障害、顎関節雑音の順に弱くなっているのではないかと推察した。

最大開口量は、あくまで患者自身による自己測定による数値を基に行っており、客観的な測定値とはいえないが、その結果は終了群および中断群ともに大きな差は認められず、統計学的な有意差もなかった。また過去の統計的観察による最大開口量の数値^{1, 2)}と比較した場合、治療終了および中断後約 2 年間では、初診時、最終通院時、アンケート調査時と経時的に最大開口量は増加していた。このことより最大開口量はある程度までは、時間の経過とともに改善すると考えられた。

治療中断理由については、最も多い理由は症状は少し残っているが、それ程気にならないという理由であった。これは他の慢性疾患治療に共通することで、患者

表4 治療中断理由

症状は少し残っているが、それ程気にならない	20
通院時間がたいへんであった	14
通院していても変化がなかった	10
症状が全くなかった	7
病院での待ち時間が長かった	5
治療方針が合わない	4
担当医の対応に不満	1
病院職員の対応に不満	1

は軽度の自覚症状は放置し、疼痛などの急性症状の出現により病院を受診するが、急性症状の改善とともに通院を止めてしまう傾向があると推察した。

その他の中断理由としては、通院時間がたいへんであった、通院していても変化がなかった、症状が全くなかった、病院での待ち時間が長いという理由が多くみられた。この中で通院していても症状に変化がなかったとの理由は、現症として雑音があると回答した患者に多かった。通院時間や病院での待ち時間が長いという回答もみられたが、患者の病気治療に対するニーズの多様化と、患者と担当医との間で疾患に対する認識の違いがあるためと考えられた。

結 語

今回われわれは顎関節症の治療終了および中断後約 2 年経過した段階で、アンケート調査を行い以下のような結果が得られた。

- 1. 治療を終了した群と中断した群とに分けて分析検討した結果、雑音症状を除いて大きな差は認めなかった。
- 2. 通院治療を継続する動機となる症状としては、疼痛、顎運動障害、顎関節雑音の順であると考えられた。
- 3. 最大開口量は時間の経過とともに増加していた。
- 4. 治療中断理由としては、症状が残存していても軽減したためという理由が多かった。

本論文の要旨は第 39 回日本口腔外科学会総会（名古屋）において発表した。

引 用 文 献

1) 丹下和久, 早川明宏, 他: 当科における顎関節症患者の臨床統計的検討(抄). 口科誌 42: 983, 1993.

2) 丹下和久, 松尾直子, 他: 当科における顎関節症患者の臨床統計的検討—第 2 報 治癒率からみた患者の分析—(抄). 日口外誌 39: 1531-1532, 1993.

3) 竹之下康治, 赤嶺悦生, 他: 顎関節症の遠隔治療成績. 日口外誌 24: 21-32, 1978.

4) 大村陽子, 筒井重行, 他: 顎関節症患者の治療中断理由について—アンケートによる調査—. 日口外誌 34: 745-751, 1988.